TADOKU JUNIOR　自然のふしぎ神話　★★★☆☆ ふつう　694語

How the Spark of Fire Was Saved

火だねがまもられたわけ

Flora J. Cooke（1895年の本）　原文そのまま　朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　世界のはてで、ふたりのおばあさんが火をまもっていました。火をみんなのものにするため、かしこいコヨーテと動物たちが力を合わせます。



Long ago when fire was first brought to earth, it was given into the care of two beldams at the end of the world.

The Cahroc Indians knew where it was hidden. They needed fire and were always planning ways to get it.

They went at last to the wise coyote.

“That is simple enough,” said he, “I will show you a way to get it. Fire is a great blessing and should be free to all people.”

The coyote knew every inch of the road to the beldams’ hut.

Along the path leading to it, he stationed beasts, the strongest and best runners nearer the hut and the weaker ones farther off.

Nearest the guarded den, he placed one of the sinewy Cahroc men.

Then he walked boldly up to the door of the hut and knocked.

The beldams, not fearing a coyote in the least, invited him in.

They were often lonely, living so near the end of the world.

When the coyote had rested before the fire for some time, he said, “The Cahroc nation need fire. Could you not give them one small spark? You would never miss it. Here it is of no use.”

The beldams answered, “We do not love it, but we dare not give it away. We must guard it while we live.”

The coyote had expected them to say this.

He sprang to the window, and instantly outside were heard such sounds, that the beldams rushed out to see what the frightful noise could be.

Each animal in the line was sounding the watch-word of fire in his own way.

The wild horse neighed, the mountain lion roared, the gray wolf howled, the serpent hissed, the buffalo bellowed, and every small animal did its part equally well.

Indeed, it is no wonder that the beldams were frightened nearly to death.

The Cahroc man brought water and told them not to fear for themselves.

The coyote seized a half-burned brand and was off in an instant.

The beldams sprang after him and followed him closely over hill and valley. Faster than the wind they flew.

They were stronger than he, and though he put all his wild-wood nerve to the strain, they steadily gained.

Soon the race must end!

But Puma, the monstrous cat, was watching, and leaped up just in time to save the brand.

Each animal was in its place and the good fire passed on.

It came at last to the Cahroc nation, and was afterwards free to all people under the sun.

There were only two mishaps in all the race.

As the squirrel turned a corner of stumps and bowlders, his beautiful tail caught fire, and a brown track was burned up over his back to his shoulders, and the curl has remained in his tail to this day.

The frog had a harder fate.

He was the last one in the line of beasts. When the brand reached him it was smaller than the smallest coal in the grate.

He seized it carefully and jumped forward as fast as he could, but the hand of the foremost beldam caught him and held him fast.

How his heart beat!

His eyeballs bulged out of his head, and he has looked ever since much in the same scared way.

He did not lose his courage, however. He swallowed the coal and sprang into the water.

Sad to tell, the beldam still held in her hand his special pride and care, his tail.

Henceforth only the tadpoles could wear tails.

The frog sought a log and sat down upon it to think.

“I did my duty, even if I lost my beauty,” he thought; “that is enough for a frog. This spark must be saved.”

After much choking he spat the swallowed spark well into the bark.

The gift came, in this way, to all men; for, in even the wettest weather, if you rub two sticks together, fire is sure to come.

Because we know how the frog hurt his throat that day, we like to listen to his hoarse voice when we hear him singing to his children in the spring.

むかし、火がはじめて地上にもたらされたとき、火は世界のはてにすむ、ふたりのおばあさんにあずけられました。

カロック族（アメリカ先住みんの一つ）の人々は、火がどこにかくされているか知っていました。人々は火がほしくて、いつも火を手に入れるやり方を考えていました。

とうとう人々は、かしこいコヨーテのところへ行きました。

「そんなのは、かんたんさ」とコヨーテは言いました。「手に入れるやり方を教えてあげよう。火は大きなめぐみなのだから、すべての人が自由に使えるべきなんだ。」

コヨーテは、おばあさんたちの小屋までの道を、すみからすみまで知っていました。

そこへつづく道ぞいに、コヨーテはけものたちをならばせました。いちばん強くて走るのが速いものを小屋の近くに、弱いものをもっと遠くに。

見はられている小屋のいちばん近くには、たくましいカロック族の男の人をひとりおきました。

それからコヨーテは、どうどうと小屋の戸口まで歩いていって、戸をたたきました。

おばあさんたちは、コヨーテなどちっともこわくなかったので、中へまねき入れました。

世界のはてのすぐ近くにすんでいたので、おばあさんたちはよくさびしい思いをしていたのです。

コヨーテはしばらく火の前で休んでから言いました。「カロック族には火がいるのです。小さな火花を一つ、分けてあげてもらえませんか？一つくらいなくなっても、気がつかないでしょう。ここでは何の役にも立っていないじゃありませんか。」

おばあさんたちは答えました。「わたしたちは火がすきなわけではないけれど、人にあげるわけにはいかないのよ。生きているかぎり、まもらなくてはならないの。」

コヨーテは、そう言われるだろうと思っていました。

コヨーテがまどにとびつくと、たちまち外から、ものすごい音が聞こえてきました。おばあさんたちは、そのおそろしい音が何なのか見ようと、外へとび出しました。

列にならんだ動物たちが、それぞれのやり方で、火のあいことばをさけんでいたのです。

野生の馬はいななき、ピューマはほえ、はい色オオカミは遠ぼえし、ヘビはシューッと言い、バッファローはうなり、小さな動物たちもみんな、同じようにりっぱに自分の役をはたしました。

おばあさんたちが、死ぬほどびっくりしたのもむりはありません。

カロック族の男の人は水を持ってきて、おばあさんたちに、あなたたちの身はだいじょうぶだと言いました。

コヨーテは半分もえた木切れをつかむと、あっというまににげ出しました。

おばあさんたちはコヨーテを追いかけ、おかをこえ谷をこえ、すぐうしろにぴったりついてきました。おばあさんたちは、風よりも速く走りました。

おばあさんたちはコヨーテより強く、コヨーテがありったけの野生の力をふりしぼっても、どんどん追いついてきました。

もうすぐ、きそ走はおわってしまう！

けれども、大きなネコのピューマが見はっていて、ちょうどまにあうようにとび上がり、木切れをうけとりました。

どの動物も自分の持ち場にいて、よい火は次々とわたされていきました。

火はとうとうカロック族のところにとどき、それからは、お日さまの下のすべての人が自由に使えるようになりました。

このきそ走の中で、まずいことは二つだけ起きました。

リスが切りかぶや大岩のかどを曲がったとき、美しいしっぽに火がつき、せなかからかたまで、茶色のすじがこげてしまいました。しっぽのまき毛は、今もそのままのこっています。

カエルは、もっとひどい目にあいました。

カエルは、けものの列のいちばんさいごにいました。木切れがカエルのところにとどいたときには、だんろのいちばん小さな炭よりも小さくなっていました。

カエルはそれを気をつけてくわえ、できるだけ速くぴょんととびましたが、先頭のおばあさんの手がカエルをつかまえて、しっかりおさえました。

カエルのむねは、どんなにドキドキしたことでしょう！

目玉が頭からとび出してしまい、それからずっと、カエルは同じようにびっくりした顔をしています。

けれども、カエルはゆうきをなくしませんでした。カエルは炭を飲みこんで、水の中へとびこみました。

悲しいことに、おばあさんの手には、カエルがとくにじまんにして大切にしていたしっぽが、まだにぎられていました。

それからというもの、しっぽがあるのはオタマジャクシだけになりました。

カエルは丸太をさがして、その上にすわって考えました。

「美しさはなくしても、ぼくはつとめをはたしたぞ」とカエルは思いました。「カエルとしては、それでじゅうぶんだ。この火花は、まもらなくてはならない。」

カエルはさんざんむせたあげく、飲みこんだ火花を、木の皮の中にしっかりはき出しました。

こうして、このおくりものはすべての人にとどきました。どんなにしめった天気でも、二本の木のぼうをこすり合わせれば、かならず火がおこるのです。

あの日カエルがどんなにのどをいためたか知っているから、春にカエルが子どもたちに歌うしわがれ声を聞くのが、わたしたちはすきなのです。

たんご と クイズ 火だねがまもられたわけ

fire 火	**coyote** コヨーテ	**wolf** オオカミ
buffalo バッファロー	**squirrel** リス	**frog** カエル
tadpoles オタマジャクシ	**sticks** 木のぼう	

Q1 火を手に入れるやり方を考えたのは、だれ？

① カエル　② かしこいコヨーテ　③ ピューマ

Q2 火をはこぶとちゅう、リスはどうなった？

① しっぽに火がついて、せなかに茶色のすじができた　② 目がとび出した　③ しっぽがなくなった

Q3 カエルは、さいごに火花をどこにはき出した？

① 川の中　② 石の上　③ 木の皮の中

こたえ

Q1 ② コヨーテは、火を小屋からみんなのところまで運べるように、道ぞいに動物たちをならばせる作せんを考えました。

Q2 ① 曲がりかどでしっぽに火がつき、せなかからかたまで茶色のすじがこげて、しっぽもくるりとまいたのです。

Q3 ③ カエルは火花を木の皮の中にはき出しました。だから木をこすると火がおこるのだとお話は語ります。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。